東京ジャーミイ金曜日のホタバ

２０１１年12月２

死に備えていること

親愛なるムスリの様

親愛なるムスリムの皆様。人生においていつでも私たちが直面しているにも関わらずなかなか認識できないでいる真実があります。死と、その後です。過去を振り返ってみるなら、金持ちも貧しい人も、若い人も老人も、いい人も悪い人も、迫害者も迫害を受けた人も、どれほどの人々がこの世界に来ては去って行ったことでしょうか。日々、私たちが愛する人が私たちを残して去っていきます。私たちもいつか愛する人々を残して去っていくべく、あらゆる瞬間に訪れる可能性のある死を待っています。日々消耗していく肉体、白くなっていく髪に「待て」ということは不可能です。望むと望まないとに関わらず、誕生によってやってきたこの世界から、死によって去っていくのです。なぜなら崇高なるアッラーは「人はすべて死を味わう。」（預言者章第３５節）と仰せられているのです。したがってこの問いを自分たちに投げかけるべきでしょう：私たちはなぜこの世界にいるのか、という問いです。この問いの答えはアッラーが次のように告げられています。「（かれは）死と生を創られた方である。それは、あなたがたの中誰の行いが優れているのかを試みられるためで、かれは偉力ならびなく寛容であられる。」（大権章第２節）

この世での生の終焉である死は、無となることではなく、はかない生から永遠の生への移行です。信仰の基本の一つである来世での生は、この世での行いの対価を見出す場所です。その日には誰も不正を行うことはできません。崇高なるアッラーはこの真実を次のように語っておられます。「一微塵の重さでも、善を行った者はそれを見る。 一微塵の重さでも、悪を行った者はそれを見る。」（地震章第７・８節）審判の日にはどのようなことに関しても反発する権利は与えられません。なぜなら私たちの前に現れるのは私たち自身の行いに他ならないからです。崇高なるアッラーは次のように仰せられています。「一人ひとりに、われはその運命を首に結び付けた。そして復活の日には、（行いの）記録された一巻が突き付けられ、かれは開いて見る。（かれは仰せられよう。）「あなたがたの記録を読みなさい。今日こそは、あなた自身が自分の清算者である」（夜の旅章１３．１４節）

「現世は来世のための耕作地である」という定理をかんがみ、来世のために備えをするべきなのです。なぜなら人はこの世界で行った最も小さな善行、あるいは最も小さな悪行の対価を必ず見出すことになるからです。勘定を問われる前に慎重に歩を進め、問われた時にこたえることができないような行いからは遠ざかる、という点においてアッラーは私たちに次のように警告をなされています。「あなたがた信仰する者よ、アッラーを畏れなさい。明日のために何をしたか、それぞれ考えなさい。

そしてアッラーを畏れなさい。本当にアッラーは、あなたがたの行うことに通暁なされる。」（集合章第１８節）
預言者ムハンマドのハディースで、今日のフトバを締めくくりたいと思います。「来世では人は次の五つのことについて問われることなくアッラーの御前から離れることはない。生涯をどこで費やしたか、若者時代を何に費やしたか、財産をどこで得てどこに使ったか、そして知っていることにしたがって行動したか否かである。」